

第5章 人道の港敦賀ムゼウムの機能計画

1. 人道の港敦賀ムゼウムの機能計画の考え方

- 機能計画の検討にあたっては、37頁で前述したムゼウムの整備方針に従い、十分な活動や受け入れ可能な規模、既存施設との相乗効果等を考慮しながら検討する。

2. 配置計画

(1) 往時の4棟

- 敦賀ノスタルジアムを感じさせる景観を可視化するため、明治後期から昭和初期をイメージした敦賀港栈橋周辺の景観を再現する。
- 当面は、「税関旅具検査所」「敦賀港駅」「大和田回漕部」「ロシア義勇艦隊」、4棟の外観を再現する。また、将来的には周囲の景観復元も検討していく。

写真：往事の敦賀港栈橋の雰囲気と復元する4棟の姿



(2) 復元4棟の配置計画

- 復元4棟は、市民との協働によるこれまでの調査に基づき、現在、金ヶ崎緑地の駐車場として利用されている区画に整備する。

図：復元4棟の位置



(3) 復元4棟のイメージ

パース：4棟の復元イメージ（「敦賀港レトロロマンARアプリ」より）



※当時の栈橋から先は、埋め立てにより金ヶ崎緑地として芝生化され海岸線が遠のいているため、当時の栈橋の雰囲気再現しにくいことに留意。

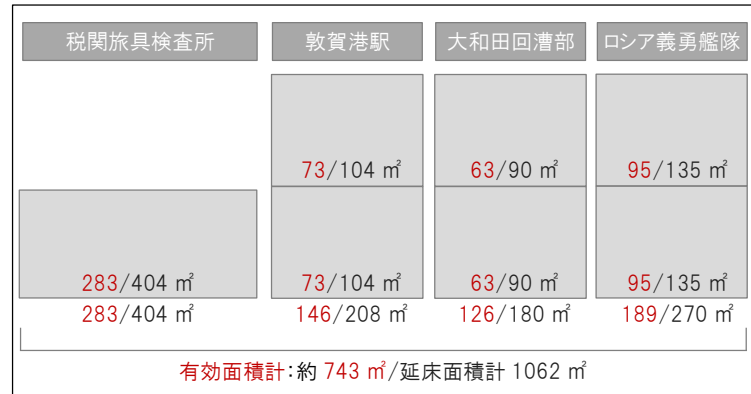
(4) 復元4棟の面積

- 復元4棟面積は、金ヶ崎周辺整備構想策定後に、民間のまちづくり団体が大正時代当時の図面を基に、復元のための測量調査を行い、位置及び面積を推定。建物面積は約733㎡、延べ床面積は約1,062㎡とした。
- スペースが不足している現ムゼウムの延床面積278㎡、展示面積177㎡に対し、復元4棟の規模はおよそ3.8倍となることから、利用者の受け入れや活動に十分なスペースを確保できる。
- なお、建物には共用部として、通路や倉庫・設備スペース等、建物の本来の目的に属さない部分が存在するため、実質的に利用できる有効面積は延床面積の約7割、約743㎡と設定する。

表：復元4棟の面積

建築物	建物面積	階層	延床面積	有効面積
税関旅具検査所	約 404 ㎡	1階	約 404 ㎡	約 283 ㎡
敦賀港駅	約 104 ㎡	2階	約 208 ㎡	約 146 ㎡
大和田回漕部	約 90 ㎡	2階	約 180 ㎡	約 126 ㎡
ロシア義勇艦隊	約 135 ㎡	2階	約 270 ㎡	約 189 ㎡
合計	約 733 ㎡	—	約 1,062 ㎡	約 743 ㎡

図：面積の概念図



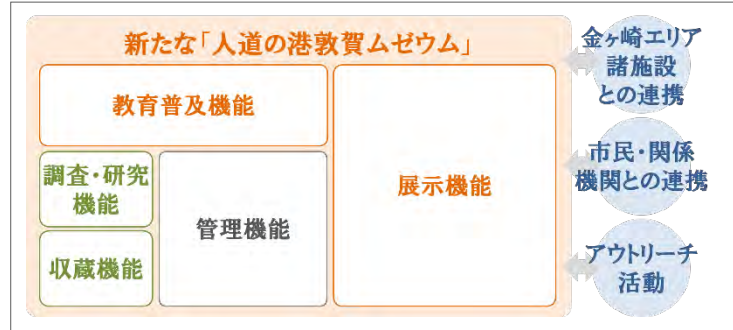
※建築設計業務において、必要な機能や規模の検討を進めて行くに従い、諸面積に若干の違いが出てくる可能性があることに留意。

3. 人道の港敦賀ムゼウムの機能

(1) ムゼウムに必要な機能

- 主に展示機能に限定されている、現在のムゼウムの機能を拡充し、諸事業の実現に十分なスペースと機能を確保する。

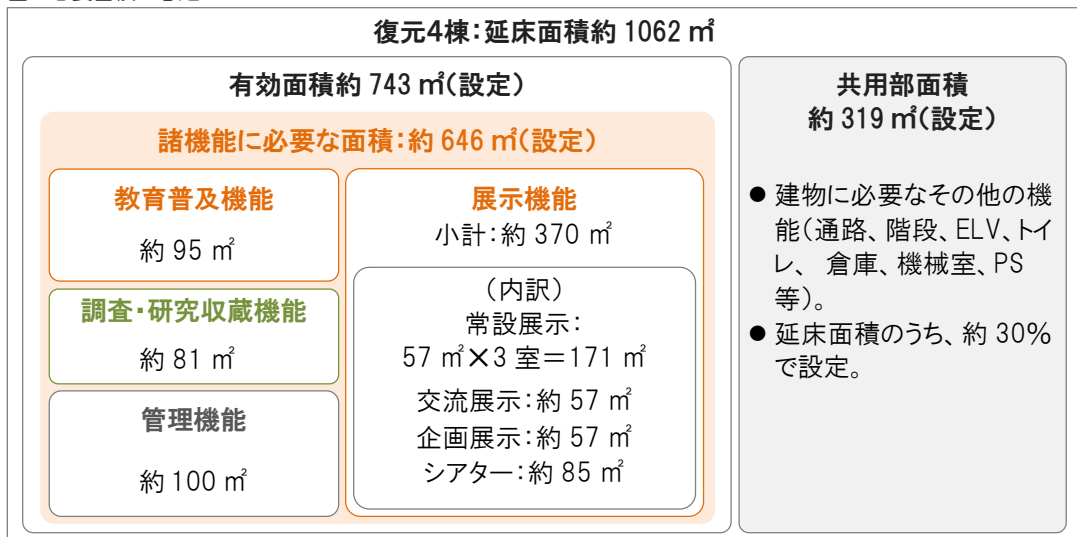
図：必要機能の概念図



(2) 基本条件

- 団体見学者が余裕を持って利用できる広さを確保する。
- 展示諸室やシアターは、1団体は約40人とし、団体バス約1台分や、学校1クラス分程度の利用者がストレスフリーで見学できるようにする。
- 教育普及機能として、団体が利用できる研修室を設ける。
- 必要に応じて眺望の機能を設ける。
- 資料の受入や保存、調査研究に伴う作業ができる収集・調査研究スペースを設ける。
- 管理機能として、事業活動や維持管理に必要な事務スペースを設ける。

図：必要面積の想定



(3) 収蔵機能

- 資料の形態や状態に応じて適切な環境で保存し、使いやすく整理できる収蔵庫を設ける。特に、紙資料や布資料といった、温湿度等の環境変化に脆弱な資料を良好な状態で保存できるよう、外気や外光が遮断され、恒湿かつ温度変化が緩やかな環境を整える。
- 資料や情報は将来的に増加することに留意し、十分なスペースを確保する。

(4) 調査・研究機能

- 敦賀に来訪したポーランド孤児やユダヤ人難民、近代敦賀の鉄道史・港湾史に関する調査・研究に必要な作業スペースを確保し、備品等を整える。
- 他分野に渡る調査・研究等、市立博物館との機能分担や連携に留意する。
- 収蔵機能と調査研究機能で約81㎡を想定規模とする。

(5) 展示機能

① 常設展示

- 現在の展示構成を踏襲しつつ拡充し、近代の敦賀の港湾や鉄道に関する情報や、ポーランド孤児、ユダヤ人難民、杉原千畝等の博愛の精神を示した人物に関する情報や資料を展示する。
- 1室あたり約57㎡の常設展示室3室を設け、約171㎡を想定規模とする。

② 交流展示

- ポーランド孤児・ユダヤ人難民が敦賀に逃れてきたことをきっかけに、現在も交流が続く世界中の当事者や家族、遺族の方々、国や関係機関等の人々と本市の交流を展示する。また、交流を通し、展示を発展拡張させていく。
- 1室で約57㎡を想定規模とする。

③ 企画展示

- 特定のテーマを掘り下げ、敦賀市や関連諸機関が所有する資料や情報等を一定期間展示する。
- 1室で約57㎡を想定規模とする。

④ シアター

- 学習旅行や団体旅行等の大人数の利用者へ、同時に等しく情報が伝えられるように、映像コンテンツを上映できるシアターを設ける。
- 一度来ただけで飽きられないよう、複数のコンテンツを提供する。
- 1室で約85㎡を想定規模とする。

⑤ 眺望

- 可能であれば、現在の敦賀港を眺望し、古き良き敦賀と重ね合わせることができる機能を設ける。

⑥ 屋外展示

- ユダヤ人難民の上陸地点をはじめ、歴史の舞台となった場所にはサインやスマホアプリ等によって情報が得られるようにする。また、モニュメント等を屋外に整備し、フォトジェニックな自撮りの名所としてSNS等で拡散できるようにする。
- 郊外の鉄道遺産等、ここを起点に市内全域を巡れるようなしくみを整える。

(6) 教育普及機能

- 講座や講演、ミニイベント等が行えるスペースを設け、学習利用や団体旅行でも利用できるようにする。
- 社会科見学の団体集合場所や、雨天でも団体でお弁当が食べられる場所としても活用する。
- 約95㎡を想定規模とする。

(7) 管理機能

- ムゼウムの管理運営に必要な、スタッフが活動しやすい規模を確保する。
- ムゼウムの維持管理運営や、広報・情報発信に関する業務を行う。
- 約100㎡を想定規模とする。

(8) 基本的な考え方

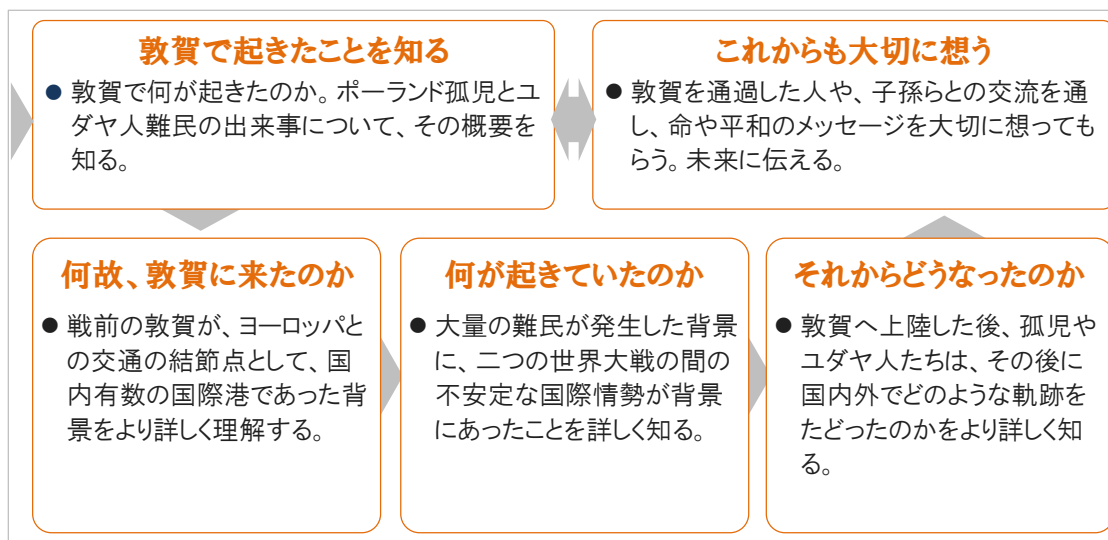
- 誰もが等しく施設を利用できたり、情報を得られるように、ユニバーサルデザインの考え方を導入する。
- 展示の観覧は、基本的に有料とする。但し、関心の薄い見学者も概略が理解できるように、無料で観覧できる展示スペースも設ける。
- 減免措置についても今後検討する。
- 各コーナーは、団体一組が余裕を持って見学や展示解説を受けられるように建築や展示を設計する。
- スムーズな動線でストーリーに連続性を持たせるとともに、時系列でわかりやすく伝える。基本的に1室1コーナーでわかりやすくテンポ良く伝える。
- 空間を象徴するような大型資料調達は難しいと推測されるため、各テーマを象徴するモノ・コトによる演出を展示設計で検討していく。

(9) 新たな構成の概念 (案)

当時から、現在、未来へのつながりを一連の流れで表す

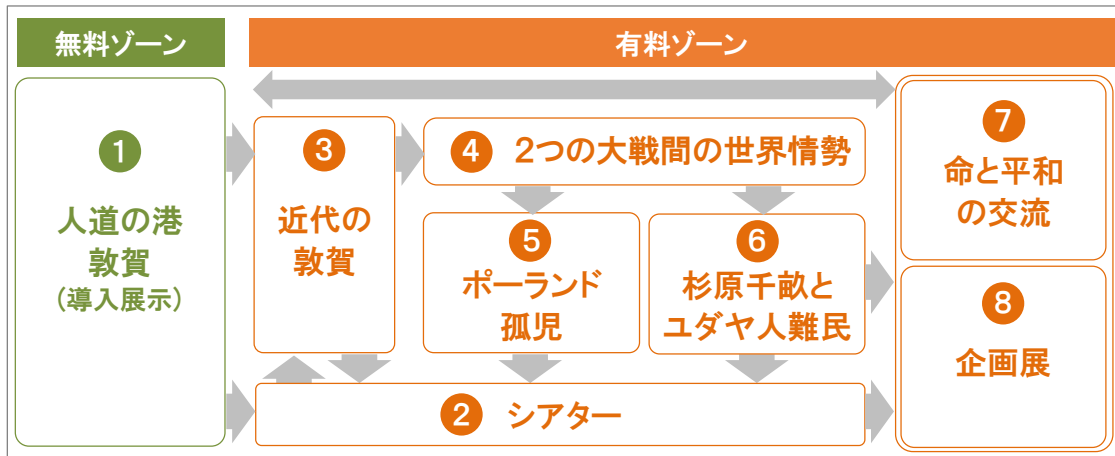
- 見やすくわかりやすい展示や配置とし、命と平和のメッセージがわかりやすく伝わるようにする。

図：展示構成の概念



(10) 新たな構成の概念

図：展示構成



- 導入部は無料で見学できるゾーンとし、敦賀で起きた、ポーランド孤児とユダヤ人難民、二つの出来事の概略がわかるようにする。
- 混雑時を想定し、展示の主導線とシアターは分け、どちらから見学しても理解できるようにする。
- 二つの物語の背景となる、近代の敦賀の重要性や、2つの大戦間の時代背景を丁寧に伝える。
- 杉原千畝とユダヤ人難民は、時系列で解説する。
- 当事者をはじめとする関係者との交流を丁寧に伝え、命と平和のメッセージを未来に伝える。

4. 展示構成

(1) 人道の港・敦賀

敦賀で起きた二つの出来事の概要を知る

① 伝達内容

- 初めて敦賀を訪れた観光客等、敦賀で起きた2つの出来事を知らない人たちに向けて、その概要を知ってもらう。
- 敦賀が近代日本の玄関口の一つだったこと、日本が手をさしのべてポーランド孤児を救ったこと、命のビザを手に、自由を求めてユダヤ人難民が逃れてきたこと、敦賀市民が温かく迎え入れたこと等を、映像コンテンツや環境演出でテンポ良く展開していく。

② 想定される主な資料・情報

- 常設展示の情報を抜粋して、短時間でわかりやすく伝える。
- 既存の映像コンテンツは有効に活用し、編集する等して活用する。

参考：空間のイメージ



③ 設計上の検討事項

- 展示観覧は有料とするため、本コーナーは無料で利用できるようにする。

(2) シアター

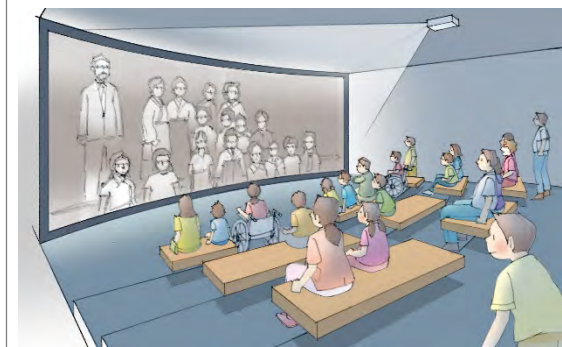
「人道の港」から博愛の精神を多面的に伝える

① 伝達内容

- このコーナー以降の観覧は有料とする。
- シアター機能は拡充し、団体見学者が余裕を持って鑑賞できるようにする。
- コンテンツはテーマごとに複数用意して、個人利用から学習旅行まで、見学者のニーズに応じて鑑賞できるようにする。
- 研修室にもシアター機能を設け、複数の

参考：シアターのイメージ

シアターは学習利用等の団体が見られるようにする。映像コンテンツは複数製作し、2つの出来事をわかりやすく概観できたり、詳しく知ることができるようにする。



② 想定される主な資料・情報

- 現状は、「ヘブンと呼ばれて」「遙かな記憶」「繋がれた命」他、7本のコンテンツを放映している※。
- 杉原千畝関係は、TV番組により度々取り上げられているため、それら既存コンテンツを活用することも視野に入れていく。
※製作年代は平成10(1998)～29(2017)年

新たな資料・情報の想定連携先
既存コンテンツ制作の放送局(福井テレビ)、NHK等関連コンテンツ制作実績のある放送局、前項に掲出の関係者等

③ 設計上の検討事項

- 有料観覧を前提とするため、見応えのあるコンテンツを新たに製作する。
- 敦賀で起きた2つの事象や、その軌跡を総括的に扱う新たなコンテンツを製作するとともに、杉原千畝とユダヤ人難民を単独で紹介するコンテンツ、ポーランド孤児を単独で紹介するコンテンツの製作を検討する。
- また、博愛の精神を未来に伝えるため、交流を通し、過去から現在へつながり、未来へ伝えるコンテンツも新たに製作を検討する。

(3) 近代の敦賀

近代日本における敦賀の重要性と華やかさを知る

① 伝達内容

- 基本的に現在の展示内容を踏襲するが、団体が見やすいように拡充する。
- 地理的要因によって、敦賀が古代から交流・交易の拠点だったことを紹介するとともに、敦賀の鉄道・港湾設備が近代の国策によって整備された事など、近代日本における敦賀の重要性を特に強調する。
- 敦賀を経由し、欧亜国際連絡列車とシベリア鉄道で、日本と欧州がつながっていたことを紹介し、当時の敦賀が文字通り「日本の玄関口」だったことを理解してもらう。

参考：コンテンツのイメージ



② 想定される主な資料・情報

- 現在は、敦賀を通過した人々や港湾風景、連絡船の古写真、古絵図等を展示。
- 新たな資料候補は、例えば港湾・鉄道遺産、欧亜国際連絡列車関係等が考えられる。

新たな資料・情報の想定連携先
敦賀市各部局・市立博物館、国会図書館・国立公文書館、県立図書館等

③ 設計上の検討事項

- 近代の敦賀を象徴する事象や遺産を選定し、展示に活用できる資料・情報を今後確認する。例えば、欧亜国際連絡列車に関する資料や、旧北陸トンネル群、立石岬灯台等の近代化遺産をどのように紹介するか検討していく。
- 敦賀が港湾都市として繁栄するベースとなった古代から近世の敦賀をどの程度扱うのか等、市立博物館の常設展示や、赤レンガ倉庫の「ノスタルジオラマ」との棲み分けを検討していく。

(4) 2つの大戦間の世界情勢

当時の不安定で混乱した世界情勢を理解する

① 伝達内容

- ポーランド孤児とユダヤ人難民、二つの事件が起きた背景を深く理解するため、2つの大戦間の世界情勢を詳しく説明する。
- 第一次大戦による欧州の疲弊と復興、その間に起きたロシア革命や、混乱していたドイツにおけるファシズムの台頭等による、当時の不安定な世界情勢を伝える。

年	当時の主な出来事
1914	第一次世界大戦(～18)
1917	ロシア革命
1919	ヴェルサイユ条約調印
1920	国際連盟成立
1920.22	ポーランド孤児上陸
1923	関東大震災
1929	世界恐慌(～32)
1930	ロンドン軍縮条約
1931	満州事変
1933	独:ヒトラー独裁、米:ニューディール政策
1937	日中戦争勃発
1939	第二次世界大戦勃発(～45)
1940	ユダヤ人難民上陸(～41)
1941	太平洋戦争勃発(～45)

② 主な資料・情報

- 現状は、ポーランド孤児とユダヤ人難民に付随する内容を展示している。
- 敦賀市では関連資料を所有していないため、資料候補は当時の世相を反映する写真・絵図や、二次資料（出版物等の編集・加工）が中心と考えられる。

③ 設計上の検討事項

- ロシア革命や世界恐慌、ナチスの台頭等、当時の世界情勢を象徴する事象を選定し、一連の流れをわかりやすく示して見学者の理解を促すようにする。

新たな資料・情報の想定連携先
近代史を扱う各出版社、研究者(監修者)、国会図書館・国立公文書館等

(5) ポーランド孤児

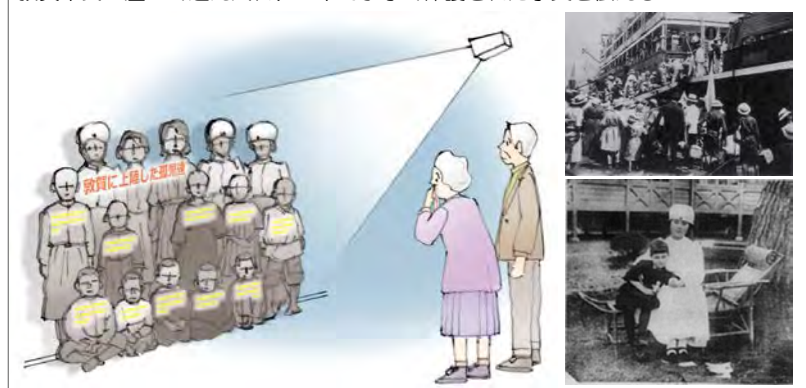
博愛の精神で、日本人が自ら手を差し伸べた事実を知る

① 伝達内容

- 基本的に現在の展示内容を踏襲するが、団体が見やすいように拡充する。
- 世界から見捨てられようとしていた孤児たちを、日本赤十字社が自ら手をさしのべた事実を知ってもらう。
- 敦賀から移動した孤児たちが、国内でどの様に過ごしていたのか、そして、国外へ脱出した孤児たちが、その後どのような経緯を辿ったのかを知る。

参考：コンテンツのイメージ

敦賀市民が温かく迎え入れ、日本で手厚く保護された事実を伝える



② 主な資料・情報

- 現状は、主に日本赤十字社や個人の提供による、写真や事務報告等書類のレプリカで構成している。
- 団体が所蔵する写真や新聞記事、個人が所有する孤児の物品や二次資料（出版物の編集・加工）が新たな資料候補として考えられる。

新たな資料・情報の連携先

日本赤十字社、孤児たち滞在了施設、ジャーナリスト、ポーランド大使館等

③ 設計上の検討事項

- ポーランド孤児に関する新資料・情報の収集は、特に難しいと推測される。関連団体や資料を所有している個人への照会と交渉が必要となる。
- 例えば、赤十字章、市民が差し入れた菓子・果物等、ポーランド孤児を象徴するアイテムの造形化や、一連の事象を早わかりできる短編の映像コンテンツ製作も視野に入れる。

(6) 杉原千畝とユダヤ人難民

博愛の精神で多くの命を救った勇気ある行動を知る

① 伝達内容

- 現在、分かれているユダヤ人難民と杉原千畝のコーナーは時系列で扱い、あわせて紹介する。
- 欧州中からリトアニアまで逃れてきたユダヤ人難民を、ナチスの干渉に屈せず、人として彼らを救おうとした勇気ある行動を紹介する。
- 杉原千畝の「命のビザ」を「命のバトン」として繋いだ人たちの功績も紹介する。
- 敦賀から移動した後、難民たちがどんな経過を辿ったのか、現在の展示をより詳しく紹介していく。

参考：コンテンツのイメージ



② 主な資料・情報

- 現在、ユダヤ人難民コーナーは、「奇跡の時計」やビザの複製、写真、市民の証言で構成している。杉原千畝コーナーは、ビザリストの複製やシアターの映像コンテンツ等で構成している。
- 未展示資料として、パスポートや手記等の書類が複数存在するため、それらと併せて展示を再構築する。

新たな資料・情報の連携先

難民の家族や子孫、八百津町や鎌倉市等、杉原千畝にゆかりの深い自治体、関係国の大使館、国内外の関連ミュージアム等

③ 設計上の検討事項

- 市民の証言は、敦賀での出来事を今に伝える貴重なデータとなるため、コンテンツを顕在化させていく。
- 例えば、リトアニアのカウナス領事館の室内再現等、杉原千畝やユダヤ人難民を象徴するアイテムの造形化や、一連の事象を早わかりできる短編の映像コンテンツ製作も視野に入れる。
- 連携先候補への照会、未展示資料活用は積極的に行い、展示を構築していく。

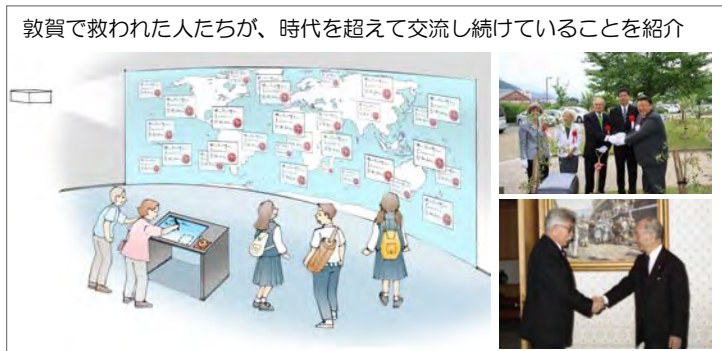
(7) 命と平和の交流

命や平和を大切に想い、その気持ちを未来に伝える

① 伝達内容

- 敦賀を経由し、生き延びた人たちが、昔も今も感謝していることを知り、そしてこれからも命や平和のメッセージを大切に想ってもらう。その想いを未来に伝える。
- ポーランドやイスラエル等、国や組織からの表彰や感謝、本人や家族、子孫等からの感謝の気持ちを紹介する。
- また、本市から情報を発信し、交流を続け、その成果を紹介していく。
- さらに、関連自治体や団体等と連携してその成果を紹介していく。

参考：コンテンツのイメージ



② 主な資料・情報

- 国や組織から授与された勲章や、記念切手、レリーフ、書籍等、比較的多くの資料を所有している。また、未公開の家族写真等も存在する。
- 現ムゼウムの開館後に、当事者や関係者から贈られたパスポートや物品等も所有している。

新たな資料・情報の想定連携先

難民の家族や子孫、八百津町・名古屋市等の関連自治体、関係国の大使館等

③ 設計上の検討事項

- 家族や遺族の方々、国や関係機関等との交流を続けることによって、今後も資料や情報が増えていくことを念頭に置いて更新性の高い空間を構築する。
- 展示資料は、ポーランド孤児やユダヤ人難民コーナーと棲み分ける。
- 家族や遺族の方々との継続的な交流の手法は今後の検討が必要。
- 関係自治体と情報交換し、その成果を、例えば、共同開催の巡回展を行う等、連携のしくみを確立する。

(8) 企画展

「人道の港」ならではの多彩なテーマで定期的に展開

① 伝達内容

- 「人道の港」に関する特定のテーマを掘り下げ、一定期間展示する。
- ポーランド孤児やユダヤ人難民を中心に、様々なテーマの企画展を定期的に開催して話題性を高め、集客に繋げる。
- 「命と平和」を広義に捉え、旬の題材による展開も視野に入れ話題性を高める。

② 主な資料・情報

- ムゼウムを中心に、敦賀市が所有する資料を用いて展示を構築する。
- 新たに入手したり、未公開の資料や情報は、積極的に公開していく。
- テーマに応じて、関連諸機関の資料や情報を借用し展示する。

③ 設計上の検討事項

- 関連する自治体や団体、ミュージアム等と共同で巡回展が開催できる関係を構築する。
- 関連機関等から借用した資料を良好な状態で保存公開できる環境を整える。

(9) その他の展示

- 金ヶ崎周辺エリアで展開する屋外の演出には、解説板等により史実を伝えられるようにする。
- 復元4棟の本来の用途についても屋外解説板等で伝えられるようにする。

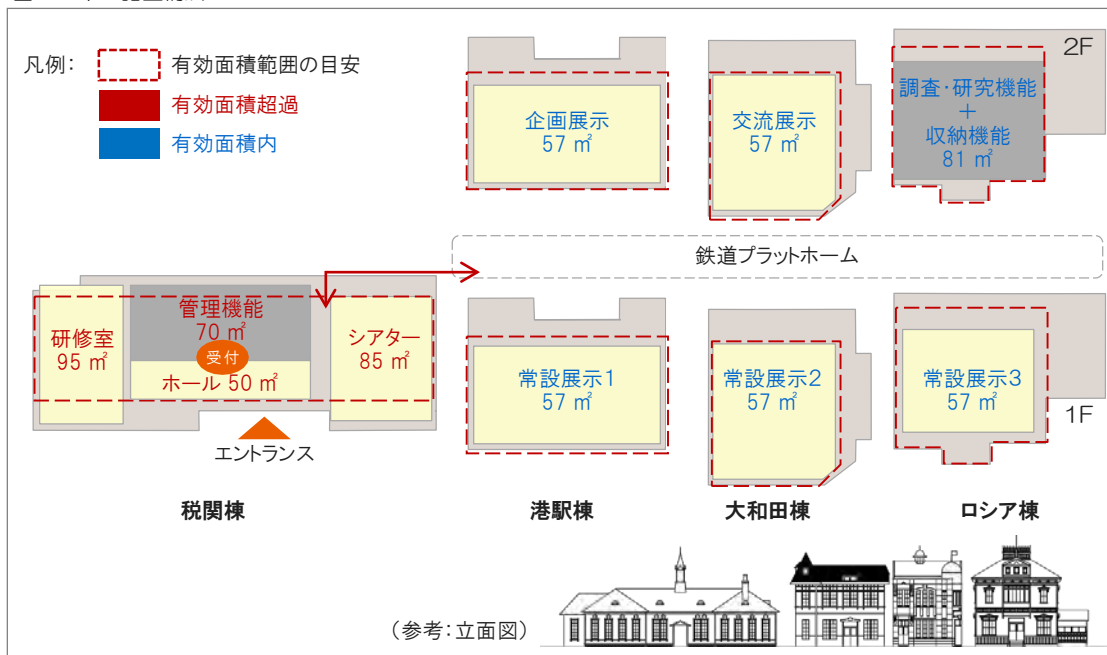
5. 機能構成

(1) 機能構成：A案

① 概要

- 税関棟にエントランスを設け、主要な展示室を3棟へ集約したレイアウト。

図：A案の諸室構成



② 機能構成のメリット・デメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> ● 研修室とシアターを入口近くに設けることで、スムーズな見学動線を取ることができる。 ● 展示機能と調査研究機能を隣接させることで、展示更新しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 管理機能と調査研究機能が離れるため、運営しにくい可能性がある。 ● 税関棟に管理機能を収めるためには、やや手狭で運営しにくい可能性がある。 ● 利用者動線上に収蔵庫があるため、厳重なセキュリティ対策が必要。

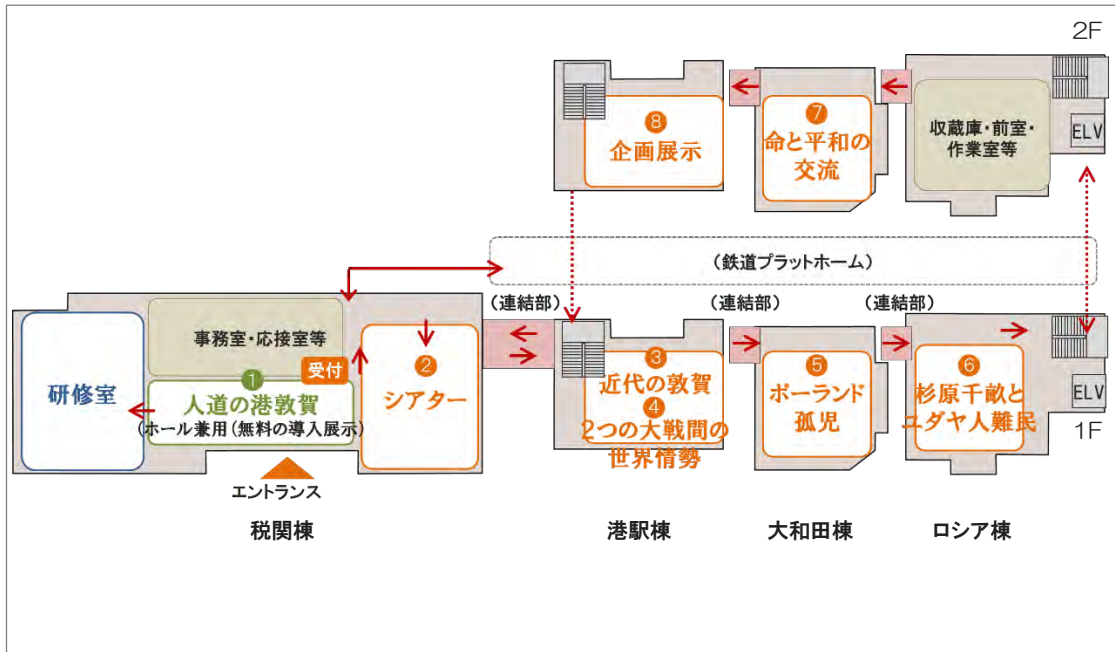
③ 面積の仮設定

税関棟	△	建物面積合計:404㎡、うち有効面積:283㎡ 各機能の面積:合計300㎡ ※有効面積の不足は約6%程度、レイアウトの工夫で実現は可能。
港駅棟	○	建物面積合計:208㎡(1F/104㎡ 2F/104㎡) うち、有効面積合計:146㎡ (1F・2F 各73㎡) 各機能の面積:114㎡(1F/常設展示57㎡ 2F/企画展示57㎡)
大和田棟	○	建物面積合計:180㎡(1F/90㎡ 2F/90㎡) うち、有効面積合計:126㎡ (1F・2F 各63㎡) 各機能の面積:114㎡(1F/常設展示57㎡ 2F/交流展示57㎡)
ロシア棟	○	建物面積合計:270㎡(1F/135㎡ 2F/135㎡) うち、有効面積合計:190㎡ (1F・2F 各95㎡) 各機能の面積:138㎡(1F/常設展示57㎡ 2F/調査・研究81㎡)

④ 各展示コーナーのレイアウト

- ホールは無料展示の「人道の港敦賀」と兼用する。
- 有料区画の展示は連続性を持たせてストーリーを作り、観覧者の気持ちが途切れないようにする。

図：A案の諸室構成



⑤ 設計上の検討事項

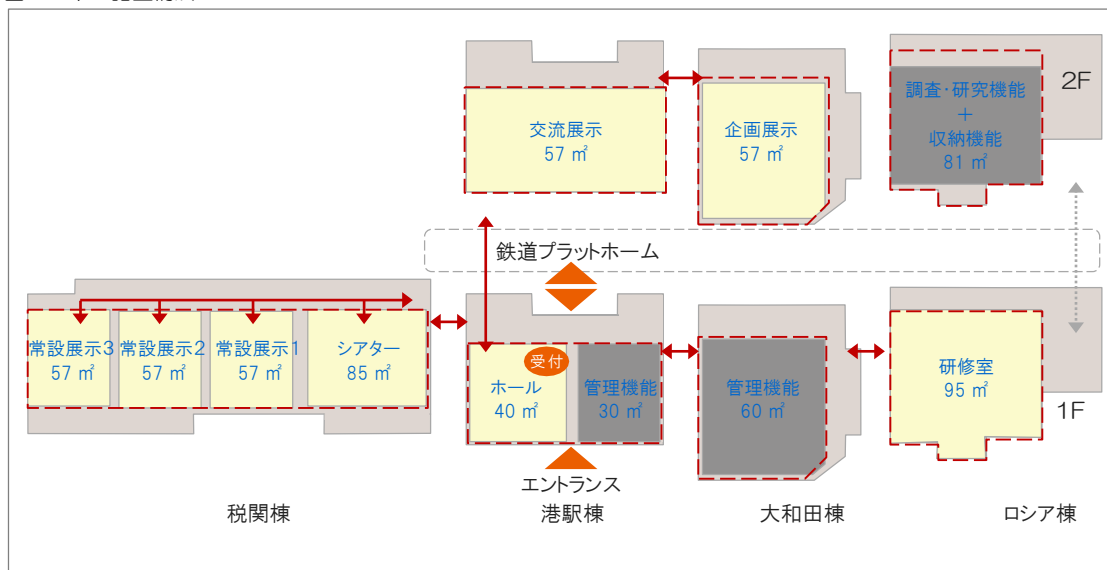
- 1室1コーナーで余裕を持たせられるが、特定コーナーを拡張させることが難しいため、展示に連続性を持たせるためには、連結部を大きく取る等の工夫が必要となる。
- 連結部の大きさ、構造や意匠に工夫が必要だが、階段やエレベーター、トイレ等の共用部を連結部へ設置することで、実質的な有効面積を増やす等の工夫を検討していく。

(2) 機能構成：B案

① 概要

- 港駅棟にエントランスを設け、税関棟へ主要展示を集約したレイアウト。

図：B案の諸室構成



② 機能構成のメリット・デメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> ● 港駅棟は南北2方向に入口を設けられ、県の計画する鉄道施設との連携が良くなり、周辺施設との利便性も向上する。 ● 交流・企画展示が調査研究機能に近く、展示更新が容易。 ● セキュリティ管理や夜間の貸室利用が行いやすく、運用しやすい。施設利用の拡張性が見込める。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 常設展示と企画・交流展示が離れるため、空間演出や展示ストーリーの連続性を出すためには工夫が必要。

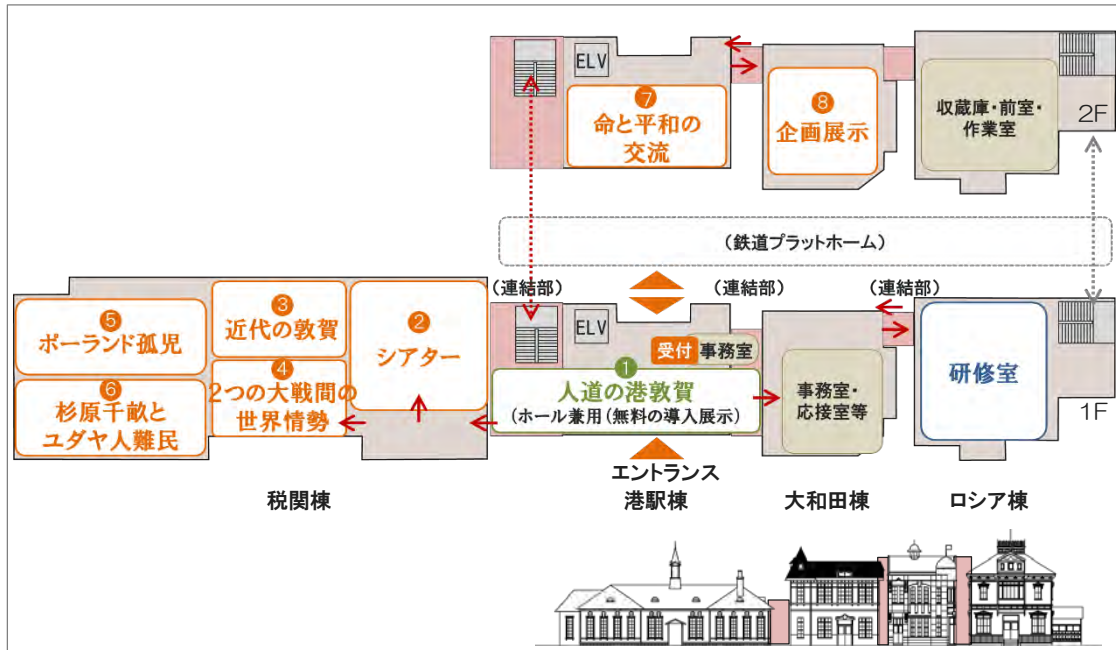
③ 面積の仮設定

税関棟	○	建物面積合計:404㎡、うち有効面積:283㎡ 各機能の面積:合計256㎡
港駅棟	○	建物面積合計:208㎡(1F/104㎡ 2F/104㎡) うち、有効面積合計:146㎡ (1F・2F 各73㎡) 各機能の面積:合計127㎡ 1F/管理機能30㎡ホール40㎡ 2F/交流展示57㎡)
大和田棟	○	建物面積合計:180㎡(1F/90㎡ 2F/90㎡) うち、有効面積合計:126㎡ (1F・2F 各63㎡) 各機能の面積:合計117㎡ 1F/管理機能60㎡ 2F/企画展示57㎡)
ロシア棟	○	建物面積合計:270㎡(1F/135㎡ 2F/135㎡) うち、有効面積合計:190㎡ (1F・2F 各95㎡) 各機能の面積:合計176㎡ 1F/研修室95㎡ 2F/調査・研究81㎡)

④ 各展示コーナーのレイアウト（案）

- ホールは無料展示の「人道の港敦賀」と兼用する。
- 税関棟のシアターと常設展示は連続性を出しやすく、空間演出も行いやすい。

図：B案の諸室構成



⑤ 設計上の検討事項

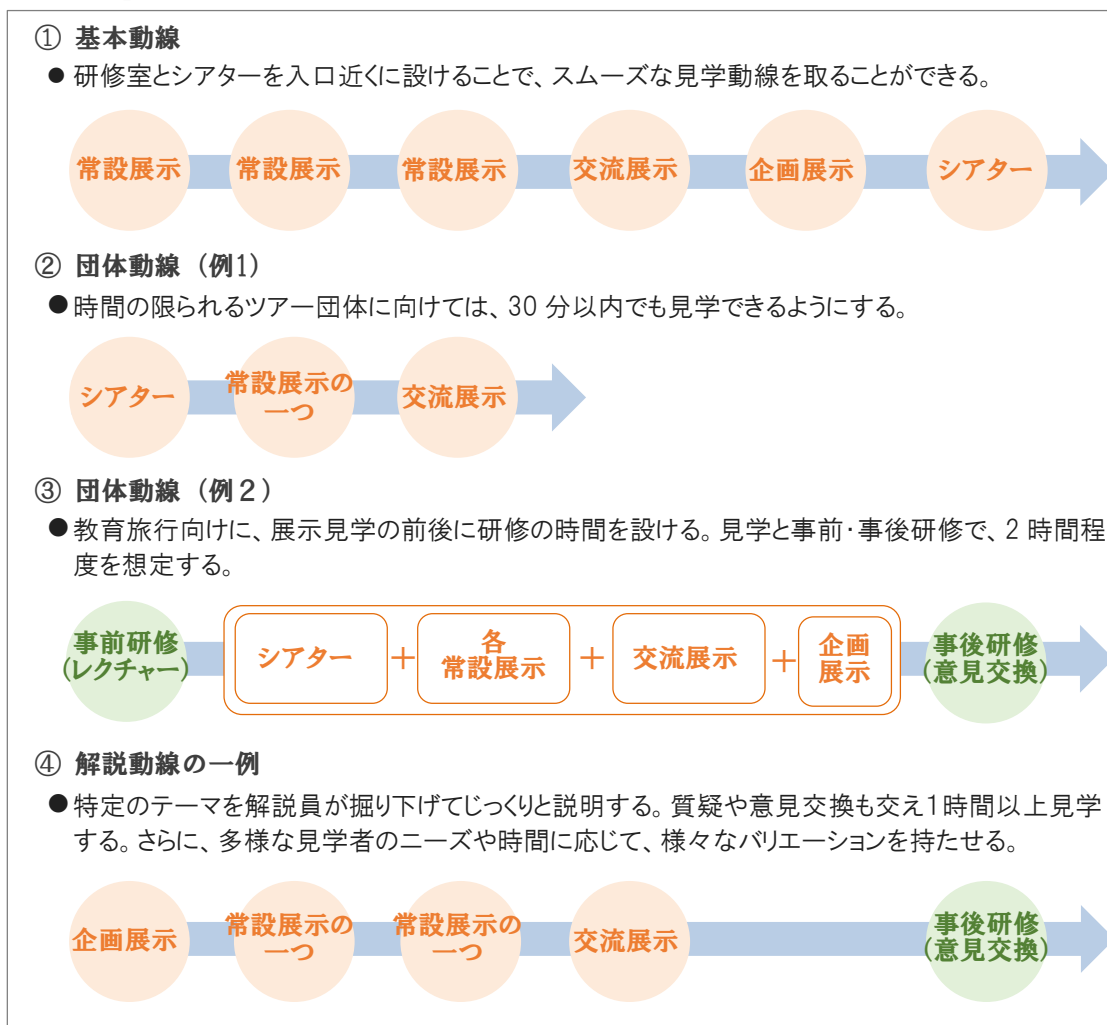
- 各棟の間は連結部を大きく取り、一体化した空間として無料展示の「人道の港敦賀」と、シアターや常設展示の連続性を出せるようにする。
- 「命と平和の交流」や、「企画展示」は収蔵庫に近い2Fに展開する等して、頻繁な展示更新へも対応しやすいようにする。
- 収蔵庫を利用者動線から外した配置として、資料の安全性を高められるようにする。
- 連結部の大きさ、構造や意匠に工夫が必要だが、階段やエレベーター、トイレ等の共用部を連結部へ設置することで、実質的な有効面積を増やす等の工夫を行っていく。

6. 利用パターンの検討

(1) 属性ごとの想定見学パターンの設定

- 個人や小グループの利用者から大人数の団体利用者、それぞれの見学時間等、属性ごとに動線を設定し、利用者の多様なニーズに応じていけるようにする。

図：利用形態に応じた動線の考え方



(2) 金ヶ崎周辺エリア全体で団体対応

- 修学旅行等の大規模団体は、金ヶ崎周辺エリア全体の資源が連携して受け入れる。多彩なアクティビティの提供により、学習利用以外の多様なニーズを受け入れる。
- また、きらめきみなと館等、周辺の既存資源も最大限に活用していく。

図：エリア全体の資源を有効活用して団体を受け入れる



図：グループで行動して時間内でエリアの資源を回遊する



7. ムゼウムから拡がる回遊性

(1) ユダヤ人難民の移動ルート

- 昭和15(1940)年に敦賀港の棧橋に降り立ったユダヤ人難民たちは、徒歩で敦賀駅まで移動した。
- その移動ルートは、市民の証言等から概ね想定できる。
- 敦賀市街は空襲によって灰燼に帰した後、区画整理を行っているが、主要道路は現在とあまり変わらないものと推測できる。

図：市民の証言をもとに、ユダヤ人難民の主な移動ルートを昭和16(1941)年の敦賀市街図に表現



(2) 移動ルートの可視化で回遊性を高める

- ユダヤ人難民らは、現在の、きらめきみなと館前から氣比神宮に向かい、国道8号線を経て白銀交差点から敦賀駅に向かったと考えられる。
- 例えば、「人道の道」等のストーリー付けを行い、回遊性を高められるように、ムゼウムから敦賀駅まで、モニュメント等でその道筋がわかるようにする。
- これらの道筋は中心市街地にもあたることから、道筋の商店街等とも連携を図っていく。

図：ユダヤ人難民の移動ルートを現在の市街地に表現 (国土地理院・地理院タイルを加工して作成)

